



新嘗祭 和源伝説

昔々和源家のご先祖様が
地頭職を持って幾つかの村を
統治していた時の事。

ある日、当時の我が家の
当主は夢を見ました。



もくじ

・はじめに	2
・新嘗祭とは	3
・新嘗祭 和源伝説	4
・鎮魂祭とは	8
・編集後記	9



はじめに

和源にはさまざま言い伝えがあります。

言い伝えにも種類があり祭礼技術の事もあれば、先祖の事跡や格言そして不思議な言い伝えなどもあります。

それらは備中・備後の草深い里で言い伝えてきた物語。

それらは外に語らずひたすらに守ってきた秘伝の数々。

言い伝え残すにも時代は変化し、人は大地から離れて自然と隔離することで現代文明の中にいます。

われわれ現代人が忘れてしまふ本来の間感覚を機会のあるうちになんらか書き残し伝えること。

現在の和源に残りその心を変えず引き継ぎ行っているその意味を伝説をここに書き表したい。

「新嘗祭とは」

新嘗祭とは、いにしえからの日本の最重要な行事で、「瑞穂(みずほ)の国(日本の美称)」「農作物の恵みに感謝する儀式で「新嘗」とはその年収穫された新しい穀物のことを指します。

古代の法典制度の「律令」では、2番目の卯の日に新嘗祭(いになめさい)を行うことになっていました。

この新嘗祭は天皇が即位してから最初に行つものをも特に大嘗祭(おおなめさい)といい、これが実質的にその天皇の即位式となっていて現在でもそのような意義を継承しています。

その年の新米は新嘗祭が終わるまでは誰も食べないのが古(いにしえ)の習慣でした。

陰暦の二月の第二卯日というと太陽暦で見ればこれはちょうど冬至頃の事です。

日本には昔から公式の暦は中国風に立春から始めるということになっていましたが、農耕民族最大の年中行事である新嘗祭を、ほぼ冬至に行うということで本当は1年を冬至から始めていたのです。



新嘗祭は新年の祭りで行年中行事で最大のものであり日本民族にとって最も重要な儀式であつたわけです。

本来は新嘗祭の前日(古の大晦日)には鎮魂祭(ちんこんさい)が行われ、翌日に群臣が小忌衣を着て集まって豊明節会(とよあかりのせちえ)が行われ、各氏族の自慢の姫たちによる五節舞(ごせちのまい)が舞われました。

なお「五節舞」の名称は舞の見事さに天の貴人たちが見物に降りて、その様がまた慶ばしく天女たちを大王が五度見上げたという古事から名前が付いています。

「新嘗祭・和源伝説」

去年の新嘗祭から今年の新嘗祭までの一年間、御神宝がご神前に安置してあります。

また今年の新嘗祭から次の新嘗祭までの間、同じものを奉納して安置する。

それは一束の稲穂。

一束の稲穂が御神宝として安置されているのは理由があります。



もっともこの理由は和源の歴史に関係があり、同じ稲穂を収めてい折られる神社もあることでしょうが、意味や理由に違いがあるが知れません。

もちろん三大御神勅に関係あるのは言うまでもありませんし、それらを深遠とする意味にもう一つ二つの歴史を加えて和源伝承となります。

ここでは和源伝承のみ簡単にお話いたします。

昔々和源家のご先祖様が地頭職を持って幾つかの村を統治していた時の事。

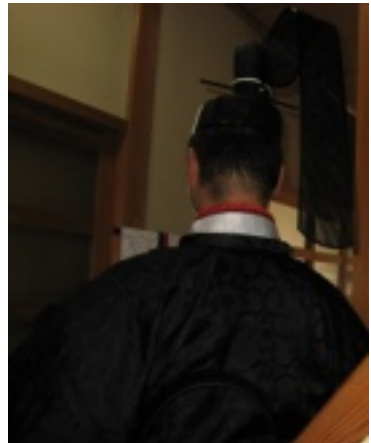
城内(少しはずれの城外かもしれません)がこのあたりは正確に場所を伝えていません)の小さな神社に毎年のように稲穂と種籾をお供えしていました。

それは神様の御敵のおかげでありがたいことに領内も安定しており豊作とは中々行かないですが、それなりのお米の収穫量でした。

領内の稲作に地頭職の我が家もかなり関係しており、管理している幾つかの貯水池の水量が六割を割ったとき水の差配を行うという役目があったためです。

ですので領内の実りの責任の幾つかを背負っているわけです。

そうして領内を無事に治めていたのですが、ある日、当





時の我が家の当主はある夢を見ました。

守護神様の社殿の扉が開いたと思つたら中から神様がお出ましになられ次のようにおっしゃりました。

「わしは腹が減つたゆえな、今年の稲穂や粃はわしが隠れるほどに積み上げ供えよ。」と。。。

その言葉を聴いてはたと目を覚まし、神様は不思議なことを言われるものじゃ。しかしお告げであるゆえその通りにいたそう、と決意して例年の三倍ほども新嘗祭にお供えしたが、新穀米をお供えしているときに耳元に「もつとじゃもつとじゃ、けちけちするな」という声が聞こえてくるではありませんか。

驚き儀式途中であつたにもかかわらず、家来に命じて新穀米をもって来させお供えしました。

「そつじゃそつじゃそれでええ」という声が聞こえ安堵し無事に儀式を終えました。

そうして年を越えて夏がやってきました。

その年は気温が上がらず作付けは不作。

その次の年は凶作となつてしまいました。

領内に食べるものなどありません。

春がやってきて稲作に取り掛かるうとしても領民は種籾まで食べてしまったという有様。

そこで初めて守護神様のお告げの意味を悟り、新嘗祭(当

時は違う呼び方をしていたかもしれませんが現代と同じく新穀をお供えします（でお供えした種物を領民に配布し領内すべて無事に稲作を始めることができました）。

神様のお告げによって領内全滅を免れ感謝を神様にささげました。

こうして和源ではその名残から、稲穂を一年間御神宝として安置することとなりました。

上記のような伝承があり、大切にお守りしていることなのです。

近年からは、共にお祈りをなした方、遠隔地でのご参加および起こしになられても同じく、一年間お供えした御神宝の稲穂を一筋御授与させていただいております。

命を繋いでくれたことへの感謝、食の感謝、新しい収穫への感謝をこめて。。。

共に感謝の祈りを捧げたいものです。



「鎮魂祭」について

現代の鎮魂という語では霊を弔うと解釈されていますが、古来でもっと大きな意味を持ちました。

その意味は弔うという意味ではなく、活力を与える・復活を促す・甦る・悪影響をもたらすものを払拭するなど総ての好転的な意味を持つものです。

揺れる心を鎮め魂を安定させて本来の力を発揮させようというものです。

存在するもの総てに生命が存在し、存在そのものが生命と
いつて過言ではありません。

そのものが存在し続けるの魂魄の働きが大事です。

心を鎮め魂魄を振り動かし、結びつけ、鎮め置く、そのもの存在を本来の姿に立ち戻らせる祈祷法こそ、「鎮魂」ということができます。

この儀式は現在は和源神官によって人目に触れないよう静に祭行されています。



編集後記

和源神道に御縁の方のため、また日本文化ことに信仰文化に興味のおありの方のために製作されております。

和源神道

〒715-0017 岡山県井原市下稲木町2434-1

電子メール kazumina@ibara.ne.jp

和源神道公式サイト <http://www.ibara.ne.jp/~konzin/>

和源神道 検索

和源神道公式サイトQRコード





神様のお告げによつて
領内全滅を免れ
感謝を神様に捧げました。
こうして和源では
その名残から、
稲穂を一年間御神宝として
安置することとなりました。



命を繋いでくれたことへの感謝、
食の感謝、新しい収穫への
感謝をこめて。。。。

